

「土地・建物」 ～工法～

アウトフレーム工法【あうとふれーむこうほう】

マンションの建築工法のひとつで、柱や梁などのフレームを室外に出す設計のことです。「アウトポール」ともいいます。従来、柱と梁で骨組みを支えるラーメン構造のマンションでは、室内側に柱型や梁型が出っ張るため、家具の配置に制約が出たり、無駄な空間が発生したりしました。アウトフレーム工法では室内側がすっきりするので、空間を有効に使えます。バルコニー側と開放廊下側の両方に柱型はありますが、バルコニー側を外に出すケースが一般的です。

アンボンド工法【あんぼんどこうほう】

ラーメン構造のマンションでは、床スラブがたわんだり、振動しないように小梁を入れるのが一般的です。そのため直天井の場合は室内に小梁が露出します。この小梁を無くしたのがアンボンド工法といえます。床スラブにPC鋼材を通して両側から引っ張ることで、あらかじめ圧縮力（プレストレス）を与えておき、床スラブのたわみを防ぎます。プレストレスト・コンクリートの工法の一つです。小梁は出ないが盤振動が起きる可能性があり、遮音性はやや落ちます。

基礎パッキング工法【きそぱっきんぐこうほう】

木造一戸建て基礎の上端と土台との間にパッキング（緩衝材。「パッキン」ともいう）を数十cm間隔に入れて、床下の換気を行う方法です。床下換気口に比べて換気効率が高いです。土台が直接基礎に触れずに浮いているため、乾燥しやすく腐朽しにくくなります。パッキングの素材は硬質ゴム・プラスチック・金属などがあります。

在来工法【ざいらいこうほう】

柱・梁・筋交い（柱と柱の間に斜めに入れる材）など、木の「軸」を組み立てて建物を支える日本の伝統的な工法です。間取りに融通がきき、大きな開口部をつくれるのが特徴となります。ふすまや障子で仕切り、縁側に掃き出し窓を並べた和風住宅を思い浮かべるとわかりやすいです。元来は木材にミゾを刻んでかみ合わせの職人技的な工法ですが、最近では、あらかじめ工場で材木をカットしたり、材の接合部に金物を用いるなど、合理化や耐久性強化が進んでいます。

直床工法【じかゆかこうほう】

マンションで、床スラブの上にカーペットやフローリングを直張りするタイプのことです。遮音性の面ではやや落ちるので、クッション性の高い床材が好ましいです。また、水回り部分の床下には給排水管を這わせなければならないため、スラブに直張りはできません。住戸のスラブ全体が平らに打ってある場合、居室部分は直張りでも、水回り部分だけ二重床で10～15cm高くなります。段差をなくすには、配管部分だけスラブを下げる必要があります。

2×4工法【つーばーふぉーこうほう】

角材の枠に構造用合板を張ったパネルを組み立てて建物をつくる工法です。一番たくさん使用される角材の断面の寸法が2インチ×4インチであることから「2×4工法」と呼びます。「枠組壁工法」ともいいます。2インチ×6インチの角材を多用した場合、特に「2×6（ツバイシックス）工法」と呼ぶこともあります。壁（面）で支えるため、耐震性・気密性に優れるとされていますが、そのぶん、窓の位置や大きさなどが制限される側面があります。

二重床工法【にじゅうゆかこうほう】

マンションで、カーペットやフローリングを床スラブに直張りせずに、間に緩衝材を入れる仕上げ方です。角材を均等に並べて床材を乗せる根太床工法、防振ゴム付きの支持ボルトを入れる置き床工法、断熱材を敷いた上にモルタルなどを打って床材を乗せる浮床工法の3タイプがあります。根太床→置き床→浮床の順に遮音性は上がりますが、建築コストも高くなります。最近の遮音等級の高いフローリングでは、置き床工法が主流になっています。

プレハブ工法【ぷれはぶこうほう】

工場で部材を生産し、ある程度まで組み立ててから現場に運んで組み上げる工法です。2×4工法に似た木質パネルを用いる工法（木質系プレハブ）や、軽量鉄骨で骨組みを作ってコンクリートパネルを張り付ける工法（鉄骨系プレハブ）など、材料も構造も住宅メーカーによってさまざまです。建物を箱形のユニットに分け、配線や内装仕上げまでほぼ工場済ませ、現場ではユニットを据え付けるだけという工法（ユニット系プレハブ）もあります。